



森山芳平工場跡

導を受ける傍ら、桐生新町の紋屋笠原才四郎に就いて本邦古来の織物意匠図案やその画法を習得し、後の研究者・指導者としての素養も身につけていった。

◆輸出羽二重の需要増と福井の要請◆

明治10年代も後半に入ると、桐生・足利から羽二重が米国へ輸出されはじめ、羽二重の需要が高まる。福井や粟田部でも横浜などと取引のある仲買商を通じて羽二重輸出好況の情報もたらされるとき、明治19年頃には福井にも羽二重の注文が入るようになってくる。この頃に、福井でも羽二重製織の新技術導入の機運が起きているが、



村野 文次郎



山岡 次郎

当時の福井には羽二重織の技術は無く、このため、新技術導入の機運が起き、桐生の羽二重織物技術者の選定と招請が課題となってくる。そして業界はこの人選を関東に出張を予定していた織物組合副組合長の村野文次郎に依頼する。村野は引き受けたものの、桐生に知人がいるわけでもなく、はつきりとした見込みはないが、それでも考えがあった。

村野は、上京するとすぐ、若き日に化学染色を習った恩師山岡次郎に会い相談した。元福井藩士の山岡次郎は藩の留学生として米国に留学し、帰国後は東京大学で教官を務め、この頃には農商務省技師に移り織物振興の先頭に立ち全国を指導。足利や桐生にも指導に何度か赴き、現地の織物業者と親しい関係にあった。

特に、足利織物の実力者川島長十郎や、桐生の機業家で早くから織物や染色改良に取り組んでいた森山工場の森山芳平とは、同志ともいふべき深い関係にまでなっていた。明治17年から18年に、足利や桐生の地では山岡次郎を招いて染色法の改良や染織り学校の運営に努めており、山岡もまたその期待に応え熱心に指導を行なっている。今日残されている森山の日記には、繰り返し山岡と打ち合わせを行なっていることや、山岡の自宅に宿泊したこ



西陣ジャカード渡来碑

となどが記録されており、山岡が桐生に向いた時は森山の自宅にも宿泊していたものと推測される。森山は、桐生織物の名を高める一方で、人一倍技術教育に熱心で、自身または弟子を各地に派遣して技術指導も行っており、今回の福井への技術者派遣の協力を頼むには最適の人物であったといえる。

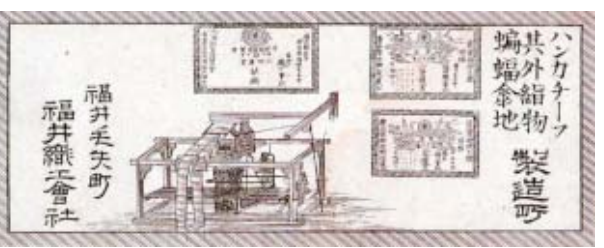
◆福井への派遣決定◆

山岡の紹介状を持って森山芳平に会った村野に、森山は工場の客員で、20歳そこそこの客員研究者であった高力直寛を派遣することを了解する。しかしこの時、森山は一つの条件を出したと言われている。それは高力を福井に派遣する前に、日本にはじめてジャカードを持ち帰った京都西陣の名工佐倉常七のもとで修行させ、西陣織りの技も身に付けさせるというものであった。その仲介の労を村野に執って欲しいとの内容であったとされる。

佐倉常七、それはかつて村野が県費伝習生として京都で修行していたときの伝習所の織物教師であった。森山から佐倉常七の名前がでてくるとは思いもしなかった村野だが、これを了解し、紹介状を書いて森山にわたし、高力直寛の福井招聘が決定することになる。明治18年11月のことであった。村野と山岡の師弟関係、山岡と森山の同志関係、森山と高力の師弟関係、村野と佐倉の友人関係、これらがパズルのように組合わされて、はじめて高力の福井招聘が実現にこぎつけたことになる。

◆福井での羽二重講習の成功◆

明治19年3月、高力はこの約束に従い、京都佐倉常七の許に赴き、紋織物やジャカード機の習得に専念する。また織機の構造などにも独自に研究したものと思われる。12月、一時桐生に戻った高力は高力家の遺児ブンを故郷から桐生に呼び寄せ、森山工場に入門させるとともに、正式に入籍を済ませ、正月明け再び京都に向き修行を続行。そして3月、佐倉のもとで修行を終えた高力直寛は、福井の関係者の熱い期待のなか、毛矢町の「織工会社」に着する。県も機業家を県庁に集め、羽二重製織技術導入の必要性を説くなど、これ



福井「織工会社」

に積極的に協力する環境のなか、「織工会社」にて高力による技術講習会は行われた。機業家1戸ごとに2人の女子が参加した講習会は、3週間という短期間で終了し、羽二重製織技術が福井

に伝授されたのである。この技術修得が僅か3週間という比較的短期間で可能であった理由としては、当時福井にはボタン機が相当数導入され、ハンカチーフや傘地などの絹織物が製織されており、その技術的蓄積があったことが主な要因と考えられている。このようにしてもたらされた羽二重製織技術は、「織工会社」が核となり先ず福井市街に普及、さらに嶺北地方の郡部にも広がって行く。明治18年には全国第10位、全国産額のわずか1.8%にすぎなかった福井県の絹織物産額が、23年には3位、27年には2位と躍進し、36年にはトップに躍り出る。羽二重生産の推移をみると、福

◆森山家からの独立◆

福井から桐生に戻った高力は、森山のもとから独立して桐生町安楽土にブントと住居を構えた。織物の設計、織機、周辺機械の操作など新技術の教授などで生計を立てることになったのである。丁度この時期、皇居造営で窓架け(カーテン)の発注が、西陣と桐生にあり、桐生では森山芳平ほか2名の機業家がこれにあたることになったことも高力の自立を授けた。

御用織物は複雑な紋織物であり、使用する機械はジャカードやピアノマシン(紋切器)など新技術が必要で、西陣で習得した高力の技術が最大限生かされたと考えられる。森山が輸入したジャカードの検品のために、高力が横浜に派遣された記録なども残っている。

◆教育界への転進◆

福井での羽二重講習の成功は、高力の生涯でもうひとつ大きな役割を果たす。東京職工学校(現東京工業大学)は、明治14年5月26日に創立されているが、創立事務や学科規定を定めたのは前述

の山岡次郎である。それから10年近くたった明治23年には東京工業学校へと改称し、学科の再編を行っている。染工科に機織科を増設し、染織工科を設置改組したのである。当時工業学校の校長は工業教育の権威者手嶋精一であるが、この改組については、学校創設者であり且つ友人で染織の第一人者でもある山岡次郎に相談している。しかし、この改革を実行に移すには織物技術に精通した教育者が必要で、手嶋校長は、機織科の教員についても当然山岡に相談したと考えられる。手嶋はわざわざ桐生の森山家に出向き、森山芳平と協議の上、教官として高力直寛の招聘を決めるが、この背景には福井における高力の羽二重講習の成果を聞いていた山岡が、森山の弟子高力を手嶋校長に推薦した結果と考えるのが妥当であろう。後に、手嶋校長と森山は生徒の実習教育で極めて親しい関係になるが、この時までは面識はなかったのである。



森山芳平